

狭い国土と貧弱な天然資源という制約にもかかわらず、わが国が現在世界の驚異とされるような大発展をアジアの一角で遂げたことはご同慶の至りであります。この大発展を支えてきた材料の一つの柱として、世界第三位のぼう大な需要にこたえているコンクリートの健斗をたたえなければなりません、このコンクリート界において昨年来新展開が行なわれようとしています。

個人会員ならびに土木学会・日本建築学会等の学協会、諸官公庁、建設方面の諸団体を構成員として、本年7月に発足し順調に育ちつつある日本コンクリート会議(JANACC)がこの新展開の眼ですが、ここに改めてこの新組織発足の意義をふりかえってみたいと思います。

日本コンクリート会議の発足が画期的であったとされる理由はつぎに述べる3点にまとめられます。

- (1) 今までいろいろの意味でばらばらであったわが国コンクリート界の横方向の連絡の円滑化をはかり、コンクリートについての共通問題を処理する広場を提供したこと。
- (2) コンクリート界の国際連合ともいべき国際機構(International Federation of Concrete Organizations)の結成が間近に迫ってきておりますが、この機構結成の重要な発起人となるための国内組織が確立したこと。
- (3) 国際機構を通じて世界の各国と連絡することができ、種々の国際的な協力にも積極的に参加できるみちが開かれたこと。

等であります。

第1の点についての一例をあげると、土木学会のコンクリート標準示方書によって、コンクリートおよび鉄筋コンクリートの設計ならびに施工の基準は示されておりますが、土木内部の各専門分野の間の横方向の連絡は必ずしも緊密ではなく、技術的な問題だけに限っても矛盾の認められることがあります。特に比較的新しい材料の示方や新しい設計施工方法の採用においていちじるしく、各分野で同じような調査試験を連絡なく行なっており、大局的に見ると大きなむだが存在しております。

それでも土木内部ではそれほどの支障はありませんが、土木と建築とを包括して考えると奇妙な状態といわざるを得ません。同じコンクリート、同じ鉄筋コンクリートでありながら、土木用・建築用とに分けられており、用語や記号も違っており、両部門のコンクリート技術者は一様に不合理・不便を痛感しております。

リーダーミキスト コンクリート会社やプレストレスト

コンクリート会社は両部門共通ですので、用語や記号に関しても2種類の様式を準備し、その使い分けに腐心しているという現状は世界に類を見ないことであります。

日本コンクリート会議の発足によって、上記の不合理は少しずつ着実に是正されつつあります。不必要な内部摩擦によってすりへらされていたわが国コンクリート技術者の貴重なエネルギーが、この組織のもとに結集され、巨大な力を発揮してゆくことが期待されます。

第2の点の国際機構は、世界の各分野におけるコンクリートおよび鉄筋コンクリートの連絡を密にするためのものです。この機構に発起人としてわが国が参加するよう要望されておりますが、いわゆる常任理事国としてこの機構で発言できることが、わが国土木界の国際的位置向上にいかにも有意義であるかは言をまたないところであります。

近着のACI(アメリカコンクリート協会)誌上に“Welcome to Japan National Council”と題して日本コンクリート会議の誕生を祝福する会長の弁がのせられています。世界の三大セメント生産国はアメリカ・ソ連・日本の三国であり、この三国がきたるべき年(1966年)に緊密かつ効果的に協力しあうことが望まれるとしてあり、日本の国際地位がコンクリート界ではすでに三大強国なみにひきあげられた感すらいたします。

第3の点ですが、従来分野ごとにそれぞれの国際会議に参加しています。しかし分野間の横の連絡が薄いために、国内でも相互の事情を把握しにくい上に、わが国に対する各国の認識も適確を欠いていたうらみがあります。国際機構が発足すれば、各種国際会議の実情把握が容易となり、コンクリート関係の情報も偏向することなく広く集取できます。

なお、わが国が国際協力に寄与することも容易となり各種の便益もたらされると思われれます。中近東諸国のコンクリート工事に対する示方書の作成をユネスコが計画している噂を耳にしたことがあります。国際機構が発足していればこの種の計画は当然この会議に持ち込まれるものであり、そのようになればわがコンクリート技術の海外進出も大いに促進されると期待されます。

残念ながらわが国の習性のようになってきた『知識を海外から吸収する』というサクシヨンパイプに代って、世界に通用する技術を世界に通用する技術者の手によって送りこむための巨大なコンクリート橋が、大アジア大陸や太平洋を一跨ぎして架けられようとしています。この橋が台風や地震でこわされないよう会員諸兄のご声援を熱望する次第であります。

*正会員 工博 東京大学教授 工学部土木工学科